師匠のグッド・バイ

シー・ユー・アゲイン　後日談１

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18595468

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, 攻めの潮吹き, ♡喘ぎ, 霊姦, モ腐サイコ小説50users入り

高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊の、後日談です。攻めの潮吹き、♡喘ぎなどが有ります。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

シー・ユー・アゲイン　後日談１

※エクボと霊幻のセカンド初夜の話がメインです

付き合い始めて、しばらく経って。
下手に肉体関係があるもんだから、当然、自然と、そういう流れになって。
霊幻をラブホに連れ込んだのはいいのだが……。
「……」
「……」
俺様はベッドの上で正座して縮こまっている霊幻が、口を開くのをかれこれ１５分ほど胡座をかいて待っていた。
「……あのさ」
「おう」
そろそろ文庫本でも取り出そうかと思い始めた時に、霊幻がやっと口を開いた。
「俺、金が絡まないセックスって、初めてでさ」
！？！？！？！？
そう言うことはもっと早く言えよコンチクショウ知ってたらもっと高いホテル押さえてたわ！！
「……ごめん、なんか、き、緊張してて……」
言いながら霊幻が耳まで真っ赤になっていくのを呆然と眺めている。
「……普通のセックスって、どんな感じ？」
「改めて訊かれると言語化しにくい……あ、そうだ霊幻。訊いておきたいことがあるんだが、お前、俺様を抱きたいとかあるか？」
「あ゛？ネコなめんなよお前。面倒くさいから嫌だよ。お前ケツの開発にどれだけ手間暇かかると思ってんだ……それともどうしても俺に抱かれてーのか？なら善処するが」
「いやごめん被りたい」

霊幻がいつもの調子に戻ってホッとした。
「あとな、これはやられたら嫌だなってこと、最初に教えておいて貰えると助かるんだが」
「？俺、エクボにならに何されてもいーよ？」
……ちょっとダメージを食らったので立て直しに時間をいただきたい。
「むしろエクボのNG教えて欲しいんだけど」
「……そう言われると、パッとは出てこねえなぁ……」
「だろ。あ、でも……」
何かを思い出したらしい霊幻は少し言い澱む。
「……友達とか連れてきて、俺をマワさせるのとかはやめて欲しい」
「だっっっっっれがするか！！むしろ俺様以外に指一本触らせないっての！！」
ほっとしたように霊幻が微笑む。
「……じゃあ、シャワー浴びてくるな」
「ああ、じゃあ俺も」
「えっ」
一緒に入ろうとした俺様を霊幻が押しとどめる。
「あ、あのな……風呂入ってるの見られるの、ホントは恥ずかしかったんだ……だから、じゅんばん、な？」
…………２回めのダメージに少し復帰に時間がかかったが、まだ大丈夫だ。まだいける。
遠くから霊幻がシャワーを浴びる音が聴こえてくる。いかん、こんな事でめちゃくちゃムラムラする。今度一緒に入る。絶対入る。あいつなら拝み倒したらオッケーしてくれるはずだ。
「……お待たせ」
風呂から出てきた霊幻は……また、グレーのスーツをキチンと着こなしていた。
「へ？」
「あっ……だってエクボ、この服でヤるの、好きだろ？」
好きだよ！！（泣）なんかしらんがびゃっと涙が出たわ！！
「すぐ！出てくるから！待ってろ！！」

俺様は超特急でシャワーを浴びて悍馬のごとく身体を洗い上げた。ホテル備え付けのバスローブを引っ掛けて部屋に戻ったら、また霊幻がベッドに正座していた。
「……何してんだよ？」
「い、いや、今から抱かれるんだなぁ、って思ったら、きゅ、急に、恥ずかしくなって……」
目元を朱に染めて所長はドギマギする。
「だ、抱かれるの待ってるの、って、は、はずいな、はは……」
……襲わなかった俺様を誰か褒めてくれ。
「……霊幻。俺様はやりたいことをするから、お前もやりたいようにやればいい。自分本位でいいんだ。スーツだって、俺様は嬉しいけど、お前はシワになったら嫌だろ」
「……うん」
「バスローブあるから、着替えちまえよ」
「いいのか？」
「今度プレイ用のスーツ買おうぜ」
「……変態。いいよ。存分に汚せるやつ買おう」
こんな。
こんな当たり前の会話を、俺はお前としてなかったんだな……。
「……着替えるから、後ろ向いててくれよ」
こ　ん　ど　ぜ　っ　た　い　ス　ト　リ　ッ　プ　さ　せ　る　か　ら　な　！　！
「……」
俺が後ろを向くと、シュル、ぷち、と霊幻がスーツを脱ぐ音が耳に入ってくる。ごそごそと着替える音が否応なく想像力を上げてくる。そろそろズボン脱いでんな……下着に手をかけたころかな……。
「……もういーよ」
振り返ると、霊幻はキッチリバスローブの前を締めて立っていた。
「電気消してくれよ、エクボ」
「はへっ？」
「お、俺のちんことか、乳首とか、子供みてぇな色だから……あんま見られたくねぇんだよ」

恥じらう霊幻にだらだら鼻血が流れてる気がする。
俺様は間接照明だけつけて電気を消した。
……悪霊なので暗くてもバッチリ見える事は黙っておこう……。
「あ、あのさ、今日アレ噛むの忘れてたんだけど……キスしてくれるか？」
アレ？……ああ、口ん中甘くするやつか。
「気にするかよ、そんなの」
ぐいっと抱き寄せて口付ける。
「えっムード無っ……んっ……」
ぶわ、と霊幻の匂いが口いっぱいに広がって。
一瞬で発情した。
俺は知ってる。この匂いは、相談所で霊幻が、大声でシゲオや芹沢を呼ぶ時に、微かに香るやつだ。
──本物の、霊幻新隆の味だ。
「んっ、んんっ、ぷぁっ、ちょっと、ん……っ」
霊幻が戸惑うのにも構わず、俺はキスを貪り続ける。角度を何度も変えて舌を吸い上げる度に霊幻の腰がひくんと跳ねるので、思わず触った。
「ひぁ……っ！？」
霊幻が俺の手から逃げる。
「馬鹿キスしながら触んな！」
「別にいいじゃねーか」
「……っ、腰抜けると、怪我するから、やるなら、ベッドの上で……」
ベロリと。
思わず舌なめずりをしてしまって、霊幻が後ずさる。
「キスがそんなに好きかよ」
「……わりぃかよ」
悪いワケあるかびっくりするぐらいエロくていいわ！！
霊幻の手を取ってエスコートしながらベッドに上がる。
バスローブを脱がせて、俺自身も脱いだ。
「いい身体してるよな……」
霊幻がペタリと俺様の腹を触る。

「あ、そーいや霊幻、俺様この身体以外も使ってお前を抱きたいんだけど、それはいいか？」
いつまでもこの守衛の身体ばかり使えない。契約してる何人かの男の顔を思い浮かべる。全員まぁまぁのスペックだったはずだ。
「中身はエクボだろ？ならいいよ。ていうか霊体でセックスってできねーの？」
「やってもいいけど、２、３日寝込むぞ、お前」
「……それは困るな……長期休みの時とかだな……」
「やるのかよ」
「そんなに気持ちいいなら試してみたいだろ」
「気持ちいいっつーか、臨死体験っつーか……ちょっと試してみるか？」
霊幻の胸に手を当てて。
魂のありか──心臓に向かって、ぐっと霊体を潜り込ませる。
「あがっ！？」
霊幻が反射的に俺の手を掴んで引き出そうとする。
霊姦は魂に直接快感が流れ込む。身体が異常事態として抵抗してるのだろう。
「お、これが霊幻ちゃんの可愛い心臓かぁ」
すりすり、と手の甲でいじらしく鼓動する臓器を撫でてやる。
「ひ、ぃ──っ！」
ビクビク震えて霊幻は強烈なメスイキをした。
神経がこれでもかと集まってる心臓は、人間最大の性感帯だ。まあ、経験できるやつは皆無に近いけど。
「おっと」
白目を剥いて倒れそうになった霊幻を片手で受け止めて、ゆっくりと霊体の片手を引き抜く。
「あ、あ、あ、あ、あ、」
その度にガクガクと頭を揺らす霊幻の、目の焦点は合っていない。
「と、まあ。内臓を犯すからな。衝撃がすごいわけだ」
「……すごかった……」
「だろうな」
「気持ちいいっつーより、窒息しかけみたいに頭がガンガン響い

て、命の危険の方を感じたわ……」
「……ま、気が向いたら声かけてくれや」
マンネリ解消にでもどうぞ、ってなもんだな。
「……ところでさっきは手の霊体だったじゃん？……ちんこだとどうなるの？」
ほほう。息も絶えだえなのによく言ったな、お前。
「……こんな感じだよ」
アナルに亀頭を当てて、霊体だけを体内に挿入する。
「あがぁっ！？」
前立腺を押し潰すどころじゃ無い。前立腺の内部をぐにゅりと通過されて、またしても壮絶なメスイキをした霊幻はカクカクと足を震えさせながら白目を剥いて気絶した。
「……」
「……はっ！？俺、今すげー綺麗な川眺めてた」
「……セックスのイく感覚って、死ぬ感覚に近いらしいからな。度が過ぎると死にかけるんだろうよ」
「凄かった……また頼むわ」
「こりねーのかよ！」
「だって、」
ごにょ、と声が小さくなる。
「えくぼと直接繋がってる、って感じが、すげー良かった……」
囁きにノックアウトされそうになる。ホント今日のこいつなんなの！？本気恋人ックスやば過ぎないか！？！？
「……エクボ、まだイってないよな？」
「そりゃあ、まあ」
霊体を霊幻の中に少し潜り込ませただけだし。
「じゃあスマタしよーぜ。フェラはアゴだりーからあんま好きじゃないし……責めたい気分でもないから今日はいいや」
フェラ好きじゃなかったのか……知ってたらあんなにさせなかったのによぉ。
「エクボ、寝て」
「？スマタだろ？」
「俺、スマタは騎乗位の方が慣れてて気持ちいいんだよ」

ハテナを飛ばしながらも、俺様は素直に横たわる。
霊幻は騎乗位をする時のように俺に跨って、俺の性器を腹側にぐいっと倒す。その上に霊幻自身を重ねて、いわゆる兜合わせの形にしてきた。
「じっとしてろよ。暴れるとちんこ折れるぞ」
怖いことを言いながら霊幻が腰を前後にグラインドさせると、
もっちりとした尻タブに挟まれて扱かれた愚息が、一瞬でイキそうになった。
「！？！？！？なんっ……これ、お前っ……！！」
「い、イイ、だろっ？」
ずりゅずりゅと裏筋同士が絡み合ったかと思ったら、すぐグズグズの尻タブに扱かれる。ダメだ我慢できねぇ。４、５回扱かれた時点で、俺は霊幻の性器に向かってぶっかけていた。
「こ、こんな技、持ってたのかよ……」
「まーな。でもフェラの方が好きな客が多いからやらない。あと暴れられると危ないのもある。俺は好きなんだけどなー」
まだ腰をにゅちにゅちと小刻みに振る霊幻。やめろってまたイキそうになるから！！
「騎乗位でいいよな？ラクだし」
勝手に霊幻が話を進めていく。もうどうにでもしてくれ。
手早く俺の性器にコンドームを被せた霊幻がそのままぐっぽりと挿入……って待て待て待て、その角度は！
「〰〰っ！！」
霊幻のナカの肉ヒダに擦られて、あっけなく射精してしまった。
「んっ、ははっ、良かった、かっ？」
「オイ腰を振り続けんじゃねぇよ何考えてやがるテメェ……！！」
にゅぐ。にちゅにちゅ。くちゅ、くちゅ、ぱん、ぱん、パンパンパンパン。
どんどん霊幻の腰つきが激しくなる。
ヤバい……っ、イッたばかりのチンポを擦られすぎて……っ！
ぷしゃあああ、と。
霊幻のナカで潮を吹いてしまった。
「……って、てめぇ、おぼえ、てろよ……」

無理矢理霊幻を持ち上げてやっと内部から解放される。
「えー、もう少し吹いとこうぜ」
「ばか、やろ……お前を一度も本イキさせないまま、セックス終わるぞ……」
「俺はそれでもいいけど？俺さぁ、自分がイクより、イカせる方が好きなんだよな」
……なるほど。つくづく向いてる男だな。何にとは今更言わないが。
「それと」
また霊幻が小声になる。
「焦らされて、焦らされて、すげぇ大きい感じでイクの、好きなんだよ」
頭の血管キレたかと思った。なるほど。今まで自分で自分に焦らしプレイしてたわけか。
ならここからは、俺様が可愛がってやらないとなぁ……？
「体位、変えるぞ」
「あ、ならバックがいい」
大きな枕を抱え込んで霊幻が四つん這いになる。
……綺麗な背中だな。
「……痕、付けてもいいぜ？」
かっ、と。
頭に血が昇った。
綺麗な背中に吸い付いて無数にキスマークを残していく。
「……っ、がっつきすぎ……」
くふくふ霊幻が笑う。だってよ、だって、お前、何を許したのか、分かってんのか……？
「……俺様のだ……」
「そーだよ。お前の霊幻新隆だ」
泣きそうになった。情けねぇ。
「……鏡の前で抱いていいか？」
四つん這いだと霊幻の顔が見えない。それはつまらないと思った。
「……えっち……」
あーやめろ、お前のえっちは本当にえっちだからやめろ。

そう言いながらも霊幻は鏡の前に移動してくれる。
「……挿れるぞ」
「……うん」
霊幻が大きな枕の位置を下にずらす。なるほど、俺に抽挿されながら、ちんこを枕にすりつけるわけか。エロいなオイ。
「は、ぁ……っ」
挿入の衝撃で霊幻が悩ましげな息を吐く。
俺は気持ちいい場所を避けながら、ぐっぐっと腰を押し付け始めた。
「あっ、あっ」
ぱさぱさと綺麗な霊幻の髪が揺れる。
「そこ、きもちい、きもちいから……」

ケモノみたいに、犯して。

「……っ！」
そう言われて、目の前が真っ赤に染まる。
「あ！あっ♡きもちいっ♡さいこうっ♡」
欲望のままに腰を振る。イク、くそ、イッてなるものか、このメスをイかすまでは……っ！
「ふーっ、ふーっ……！」
イクのを我慢しすぎて頭が痛くなってくる。
「えくぼぉ♡」
鏡越しに、笑いながら喘ぎ顔を晒す霊幻と目が合う。
「好きだぜぇ♡」
突くたびにビクンビクン震える身体。
「好きっ、好きっ、すきぃ……♡」
霊幻の声が上擦る奥を何度も狙ってやる。
「あぁんっ♡そこ、もっと……♡」
ケダモノの、メスが。
うっとりと、俺様を見つめている。
「……っ！」
ビクビクと甘イキを繰り返す霊幻の細腰を掴み、思いっきり抜けそ

うなほど引き抜いてから、ズパンと音がするほど深く打ち込んでやる。
「あーっ♡」
霊幻がちかりと目を瞬かせる。
「えくぼ、のっ、ケダモノぉ♡」
何度もそれを繰り返すと、甘ったるい声で霊幻がそんな事をのたまう。
「うるせぇ、どっち、が……っ！」
「ぁ……っ」
突然、掠れた声を上げて霊幻の動きが鈍くなる。
「イ、イク、いく……っ」
ぎゅううと霊幻の足の指が縮まる。
「そーかよ」
ズパン、と一際深く腰を押し付けて。
「……イけ」
ぐりっ、と先端で奥を強く捏ねてやった。
「〜〜〜〜〜〜〜っ♡♡♡♡」
ぎゅううと霊幻の背が丸まる。腰から這い回る電流のような快感に耐えているのだろう。俺様もやっと精液をびゅるびゅると吐き出して、スッキリとした爽快感を味わう。イキ我慢しすぎて解放感が強すぎるわ、ちくしょう。今度は俺様のペースでやりたい。
「なあ霊幻、今度は正常位でやりたい」
コンドームの口を縛りながら言うと、じろ、と仰向けになったチベットスナギツネが無情になっていた。
「俺、一晩に何回もイくの好きじゃないんだよな」
……はい。
「でもまぁ、いーよ。ほら」
くぱぁと無表情にアソコを広げて見せる霊幻。
それで勃つのが悔しい……。
「ほんとにえくぼは俺が好きだなぁ……あっ♡」
それでも挿入すると高い声が上がる。
「それはお前もだろ」
「あっ、んっ、ぅんっ、うん……♡」

乳首を指で擦ると鋭い声が響いて、その後睨まれた。
「乳首触んな」
「気持ちいいだろ？」
「だからぁっ、今日はもう、イキたくない、ってぇ……っん♡」
乳首をしつこく弄られた霊幻が、眉を寄せてビクビクとメスイキする。
そのうねりに逆らわず、俺は精を霊幻の内部にゆったり擦り付けた。射精感が素直に気持ちいい。
「……えくぼ♡」
可愛い恋人が両手を広げてキスをねだってきたので。
「……霊幻」
俺はぎゅっと霊幻を抱きしめて、長い長いキスをした。

※※※※※

——時は経ち、１０年後。
そこには霊幻には残酷な光景が広がっていた。
霊幻の目の前には、霊幻が何を犠牲にしても守ろうとしていた、相談所の卒業生たち。
彼らが、札束を積んで……霊幻を買おうとしていた。
震える霊幻の左手の薬指の指輪がキラりと光って、それが余計に霊幻を追い詰めているのが、俺様には分かったから。
俺様はそっと、霊幻の耳元に口を寄せる。
「愛してるぜ、霊幻——大丈夫だ」
ニヤリと悪霊が笑った。
「喰い散らかしてこい」
ピタ、と霊幻の震えが止まる。
「……『俺』を利用するにあたって、いくつか約束して欲しいことがある」
つうっ、と涙を流しながら。
「キスマークとか身体に痕を残すのは禁止だ。当然ハードなSMも禁止。言葉責めとかぐらいならいいけど、スパンキングはダメだ。それと、」

霊幻は、弟子たちの前で、
「オプションで、恋人にもなれるが──」
そっと、地獄の蓋を、開けた。

続